

# 新刊書評 ～なくてもいいものだから～

基礎教育 大島 武



2004年より東京工芸大学芸術学部にて教育研究に従事。専門はビジネス実務論、パフォーマンス研究。日本ビジネス実務学会副会長、国際パフォーマンス学会副理事長。コミュニケーション、プレゼンテーション関連の著作が多く、全国でセミナーや講演なども実施している。直近では論文「医療安全とコミュニケーションの技術」(「麻醉:増刊号」日本麻酔科学会準機関誌)を発表予定。



ビジネス誌「プレジデント」で執筆した新刊書評50点を展示。大学院の授業では、「優れた芸術作品に余計な解説はいらないとする考え方もあり、評論はそれゆえに原作品と拮抗しなければならない」と講じている。今回の書評が学生の手本になり得るか、各位の評価を仰ぎたい。

新刊書評 ● book review



enjoy reading

**A** I(人工知能)、シンギュラリティ(奇点)が近づいた感じが、全くわかりませんが、心配もありません。そう悩んでいる方も少なくないのでは……それは私です。というわけで、一念発起して関連書籍をまとめて読みました。本書は専門に走りすぎず読みやすい仕上がり。人工知能が人の働き方、教育、倫理、法律などにどのような影響を与えるか、バランスよく解説していただけた。多くの人はAIを誤解してまよっています。これは最近刊行された書籍には共通の主張で、本書ではそれを知能と知性の違いで説明する。決まった正解を探さず、「知能」で、また正解らしい正解が決まっていなくて、実際に行動を起こさないとわからない案を考案する能力が「知性」。データにないことを創造できない

**出遅れた人でも人工知能を学び直せる良書**

(知性を持たない)人工知能の現状は人類を凌駕するレベルには程遠いのだという。AIの基礎技術である「機械学習」とは、大量のデータを機械が読み込ませて特徴を抽出し、分類や判断といった推論のためのルールを機械につくらせる仕組み。そのためアルゴリズムの例として「教師あり学習」「教師なし学習」「強化学習」「ニューラルネットワーク」(※2)が挙げられている。文章には苦しいが、その説明に、今出合った人を大阪のおばちゃんに分類できるか、というお題が使われていて秀逸。紙面内で説明しきれないが、「読して膝を打つてもいい」、全体にAIによるテキストピア(※1)世界との到来といった極端な悲観論を戒めており、かといつて楽観ばかりで

もない。たとえば、現在は運転者が責任をもって安全運転を行うことを前提とした運転支援技術である「同乗者」の形態。自動運転。また先とはいえ、人工知能を搭載する「人の命に携わる」システムとして最も実現性の高いもの一つだろう。将来の自動運転転換の責任は、運転者にあるのか、開発者にあるのか。法的

も責任の所在の解決こそ喫緊の課題だと警鐘を鳴らす。本書は該当の分かれるテーマについて、一つの決定的解を提示するのではなく、中庸な意見、あるいは両論併記でも構わない。ウエブ上の連載であり、結論の決まっているコンテンツよりも、あえて最後に読者に委ねて議論を喚起するほうがNSでシェアされやすくなることを狙ったからだと、こんなブツヤケ、いかにも新時代の書き手という感じがした。それにしても大塚書店の書籍にAI関連本があまりに多いのに驚いた。本書以外のお勧めは、すでにベストセラーだが、「AI VS教科書が読めない子どもたち」(※3)である。視点と書名、明快である。逆にモヤモヤ感を楽しみたい方は「人工知能とは」(人工知能学)安藤 隆一 著



**AIは人間の仕事を奪うのか?**

● 松本健太郎(マーケティングメトリクス研究所所長)著  
● C&R研究所  
● 本体価格1830円+税

「AIは人間の仕事を奪うのか?」

● 松本健太郎(マーケティングメトリクス研究所所長)著  
● C&R研究所  
● 本体価格1830円+税

本の時間

大島 武

東京工芸大学教授  
ペリオル経営大学院教授、NIT経営を経て、2012年より現職。第1大賞  
氏の共著に「君たちはなぜ、怒らないのか? 大島 武と50の言葉」

お読み、たけし●1963年生まれ。一橋大学社会学部卒業後、ロンドン大学インペリアル経営大学院修士、NIT経営を経て、2012年より現職。第1大賞  
氏の共著に「君たちはなぜ、怒らないのか? 大島 武と50の言葉」

※1 シンギュラリティ……人工知能が到達し、人間の知性を超えることによって、人間の生活に大きな変化が起こるといわれる概念  
※2 ニューラルネットワーク……人間の脳にある神経細胞(ニューロン)とそのつながりを、人工ニューロンという数式的なモデルで表現したもの